

殊な形態と機能を有する部分を意味するようになつた。即ち花粉をそこに止める乳頭毛と粘液の存在、花粉管の発生を促がし、これを花柱部に導びく、栄養物質、ホルモンなどの分泌とその濃度傾斜の存在である。所が、日本の植物学用語の基礎をその発達の初期において築いた「植学譯鑑」(明治7年5月文部省出版)が stigma に対して「柱頭」なる訳を与えたため、往々 stigma 花が柱の先端の立体的な形を意味するかの如く誤解する方が出て來た。雌しべを形成する果葉 (Carpel) 即ち大胞子葉には、胚珠を有する部分 (fertile part) これを有しない部分 (sterile part) 及び花粉を受ける部分 (receptive part) があり、それぞれ、子房、花柱、柱頭、を形作つている。植物学を最初に本格的に東洋語に訳した彼の韋廉臣 (英人 Alexander Williamson), 艾約瑟 (同 Joseph Edkins) 及び李善蘭 (中国人) の「植物学」全3巻 (咸豐3年, 1857年出版, 延慶3年, 1867年本邦にて翻刻出版) にはその所が甚だ本質的に解説されている。「毎皮 (註. 皮は果葉のこと) 分為三体, 下曰子房, 中曰管, 末曰口」管は即ち花柱で花粉管を誘導する所、事実管状になつてゐるものが多く、たとえそうくなつていなくても、間隙の多い組織になつてゐる。口は即ち柱頭で、事実穴があいてゐることが多く、receptive part であることを現わし得ていて絶妙である。

○車軸藻類覚書 (I) (加崎英男) Hideo KASAKI: Miscellany on Charophyta (I)

1. 茨城県下の車軸藻類 Notes on the Charophyta-flora in Ibaragi Prefecture.

昨年 11 月 24・25 両日茨城大佐藤正己教授の御好意により、同大に新設された涸沼臨湖実験所の見学かたがた涸沼及水戸市近傍に採集を行う機会を得たが、又丁度この採集と前後して都立大生態学研究室の霞ヶ浦調査があり同研究室坂本充氏を通し材料の提供を受けたので、両者を併せて報告し、数少い茨城県下の車軸藻のリストに加え記録に留めることとした。

①千波沼 (水戸市常磐公園下): *Chara Braunii* Gmel. 西南隅寄りのハス群落に近い所に小群落 (水深 50 cm~1 m)

②涸沼 (水戸市東南方約 15 km): ④ *C. Braunii* Gmel. 宮ヶ崎部落沿岸, ⑤ *C. globularis* Thuil. 潟沼川流入附近 (水深 20~50 cm). 尚涸沼は元来汽水湖であるが採集地附近は涸沼川の流入により塩分濃度は極めて低い。

③西茨城郡北川根村下郷の溜池 (常磐線岩間駅東北方約 4 km): *Nitella pseudofabel-lata* A. Br. var. *mucosa* Vail. 既に半ば以上枯れた状態。この地域は 1954 年秋佐藤正己博士による採集記録があり、同定の結果両者共上記の種類であつた。

④霞ヶ浦 (木原附近沿岸—土浦東南方約 10 km): ④ *C. corallina* Willd. ⑤ *C. globularis* Thuil. ⑥ *N. hyalina* Ag. は小枝先端が 4~5 節迄皮層を欠く特徴を示して居り (正常のものでは 2~3 節のみが裸) 上の如く命名した。和名はソデヌギシヤジクモとする。

以上の他茨城県下よりは次の如き記録があるに過ぎない。

C. Braunii Gmel. 北浦 1941 森岡 (現 加崎)

C. Benthamii A. Br. 松岡町 1950 今堀

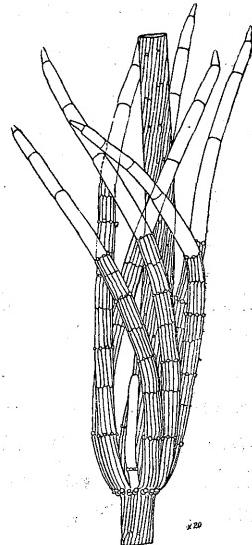
Chara g'obularis Thuil. f. **seminudifolia** Kasaki f. nov. (Fig.)

Segmenta ramulorum superiora semper 4-5 ecoriata.

Hab. Hondo: Pref. Ibaragi in lake Kasumigaura. (Leg. M. Sakamoto, Nov. 23, 1956, No. 3191—type in herb. Tokyo Metrop. Univ.

2. ホシツリモ *Nitellopsis* の新産地 On the second discovery of *Nitellopsis* in Japan.

筆者は昨年本誌上(31巻4号p. 97~101)で、箱根芦の湖より得られたホシツリモ *Nitellopsis* を車軸藻類の日本新産属として紹介し、その後ひそかに第2産地を期待していたのであるが、意外に早くこの目的が達せられた。即ち昨年秋富士五湖地方に採集を行つた折、第2の発見地として河口湖を(31年10月9日)、更に第3番目の産地として中山湖を(10月10日)記録し得ることとなつた。中山湖では稀にのみそれもsterileの個体を得たに過ぎないが、河口湖では極めて見事な群落が一小湾部内に発達し、且つ芦の湖では3年間遂に発見出来なかつた成熟卵器を発見し欣喜した次第である。(前報で述べた如くこの植物はstarsによる無性生殖が普通に行われるため有性生殖器官をつけることは本来極めて稀のようである)。尚雄器はこの際得られなかつたので10月27・28両日再び同地を訪れて調査したが、雄器は昨年は遂に未発見に終つた。慌しい日程であつたため湖沼条件の測定は充分行えなかつたが今迄報告された記録を斟酌すれば、両湖は芦の湖と極めて類似した型の湖であり、*Nitellopsis* の生育条件並びに分布の予想が一応窺える様に思われる。尚この調査に種々御便宜を賜つた藤伊魁氏に心から感謝申し上げる。(東京都立大学理学部生物学教室)



○中部山岳地帯のハイマツ着生蘚苔類群落 (岩月善之助・服部新佐) Zenno-suke IWATSUKI and Shinsuke HATTORI: Epiphytic bryophyte communities on *Pinus pumila*, an alpine shrubby pine, on Japanese Alps.

我々は1955年夏中部山岳地帯の着生蘚苔類の調査を行い既に研究の大半を終了したが、そのうちハイマツに関するデータを整理して報告する。

調査地点として長野県木曾駒ヶ岳及び富山县立山の二山を選び、環境が厳しくハイマツの生育状態が貧弱な尾根附近、ハイマツが大形となり且つ各種の灌木が混るカール底及びその中間の斜面など三つの異った環境を調査の対象とした。調査に当つては2×2mの方形枠57ヶ(木曾駒ヶ岳35、立山22)を上記三区域のハイマツ群落内に散布し、管